村瀬家の茶室「治庵」にて、瀬戸内の思い出話に花が咲く。右から亜里さんのご主人の漆芸家・村瀬治兵衛さん、村瀬家の月釜「二十日会」の水屋をお手伝いしていただいている路川昌子さん。村瀬さんは10月5日～7日、東京・港区の東美アートフェアで展覧会を予定。
問 水戸忠交易
☎03-3239-0845

〝こうしていると瀬戸内の夕日がよみがえってくるよう〟

――大村万里子さん

瀬戸内の風土 あってこその茶の湯文化

村瀬治兵衛（以下治兵衛） 瀬戸内に旅したのは金重有邦さんのご縁と、銀座にあった「ギャラリー無境」のご主人、塚田晴可（はるよし）さん（故人）の影響だったのだよね。

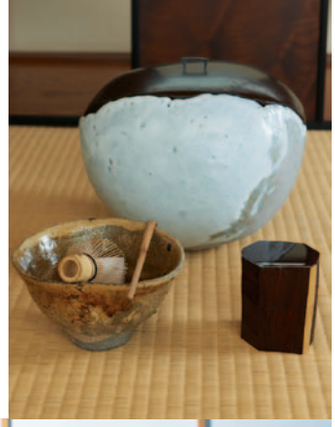
村瀬亜里（以下亜里） ずっと「香川の茶の湯文化が面白い」とすすめてくださっていたのに、これまで伺えなくて。

大村万里子（以下大村） 「永楽亭」さんや「や和らぎ たかす」さんのことをお聞きしたのも、塚田さんから。

路川昌子 香川で茶の湯が盛んなのは、どうして？

亜里 「冨久ろ屋」さんでお聞きした歴史的な背景はもちろん、茶の湯の魅力を現代に伝える方々の存在があります。高松市に「中條文化振興財団」という、香川で育まれてきた茶の湯文化の普及活動をされている団体があり、素晴らしいお茶室での茶の湯講座や、街ぐるみで茶席を掛けるようなユニークな大茶会を企画されていて、大人気なんだそう。素敵ですよね。

大村 印象的だったのは、それぞれの場



〝旅で見つけた道具は、茶席の話題をいつも以上に盛り上げてくれます〟

――村瀬亜里さん

（上上）李 禹煥氏、金重有邦氏の作品を知るきっかけとなった「茶の湯同好会茶会」主宰・林屋晴三さん作の茶杓を用いた。
（上）替茶碗は韓国の現代陶磁を代表する作家・朴 英淑氏の白磁と今回求めた荒川尚也氏のガラス。白磁の絵付けは李 禹煥氏。

会記　於　治庵

床	《From Point 1980》	李 禹煥
花入	伊部花器	金重有邦
花	ナナカマド	
風炉先	鉄刀木市松	西村次郎
釜	時代	
炉縁	吉野金峯山寺古材	
水指		小川待子
茶入	紅溜鉈削	村瀬治兵衛
茶碗	黄釉	鯉江良二
	白茶碗	朴英淑
		李禹煥染付
	ガラス碗	荒川尚也
茶杓	竹　林屋晴三	
蓋置	千鳥	前田正博
建水	欅	村瀬治兵衛
菓子	小男鹿	冨士屋
菓子	月	
器	欅足付盤	村瀬治兵衛

所やお店が、土地の風土と結びついている感じがしたこと。李禹煥さんの作品はいろいろな所で拝見しましたが、直島の「李禹煥美術館」での鑑賞は特別な体験でした。海が結界となって生まれた空間で、作品と向き合うことができました。

亜里　「永楽亭」さんの真面目なお仕事に同じことを感じました。目前が瀬戸内海で、山も近くて、温暖な気候で。だからこのお料理があるという感じ。東京で自然を感じるのは難しいけれど、場に適ったおもてなしを心掛けたいですね。

大村　こうしていると、瀬戸内の夕日がよみがえってくるようです。亜里さんの〝お茶目〟に適うものも見つかりましたよね（笑）。「や和らぎ たかす」さんで見つけたガラス茶碗、とても素敵。

亜里　旅先ではいつも夫婦で〝お茶の目〟を光らせて、記念に持ち帰るものを探してしまいます。その土地に根づいた、お茶に適うもの。今回は大収穫でした。

治兵衛　旅でみつけた道具は、茶席で大活躍しますよね。お客様との話題もいつも以上に盛り上がります。